



中国主席☆☆

華国鋒の

徹底大研究

■その出生、経歴、思想、行動のすべて

かつて湖南省にあつて笑面虎（表面はニコニコしていて心が陰険な人）と噂された華国鋒。年齢一つとっても五十九歳から六十七歳まで諸説紛々、得体の知れない人物である。けだし、この男にとって帝王の座は決して偶然なものではない。彼こそは江青以上の毛側近だった。

編・訳／中嶋嶺雄

毛・周双方の地位と権力

ついで、二年前、いわゆる「批林批孔」運動をけなわの中国では、幼稚園の子どもたちまでが林彪批判・孔子批判のキャンペーンに参加し、「ビー・リン（批林）、ビー・コン（批孔）、ピッ、ピッ、ピッ」と歌い、踊っていた。あの文化大革命の高揚期に、毛沢東をたたえ、林彪をたたえて子どもたちが劉少奇打倒を叫んでいた

たのと同様であった、その中国で今度は、文化大革命の中心的な担い手であった江青、張春橋、姚文元、王洪文の上海グループ四人組が劇的な転落を遂げ、「四害を除く」とのスローガンのもとに、これら「黒四人組」はいまや幼稚園の子どもたちから「チュッ、チュッ、チュッ、チュッ、チュッ、チュッ（除）、スーハイ（四害）」とあざけられている。

しかも、江青女史は、偉大な帝王、毛沢東の未亡人であり、まだ「喪」も明

けなかつたというのに、帝王の霊前で弔辞を読んだその男（華国鋒）が「喪主」もろとも一網打尽に打ちとって、八億民衆の「公敵」にしてしまったのである。

いかに、文革派上海グループが大衆から湧き上がった存在であつたとはいへ、いかに彼女らが、「君側の奸」として政治を私物化してきたとはいへ、このような酷烈きわまりない背信的処断は常人には不可能であろう。もともと「階級闘争」の名のもとでの中国における権力闘争は、まさに文革派の主張どおり、「喰うか喰われるかの闘争」なのであるから、このような挙に出なければ、華国鋒が「喰われ」たかもしれない。こうして、過去十年間、文化大革命の旗手として、「毛沢東思想」のもっとも正統的な継承者として、毛沢東体制下の激動の中国の最上層に位置してきた上海グループ「四人組」は一挙に失墜してしまつた。

この驚くべきドラマを代償として、つい八か月前には、一般にはほとんど名も知れなかつた党内序列第十四位（副総理序列でも第六位）の人物が、ついに「帝王」の地位を継いで党主席となつたのである。しかも当面は國務院総理をも兼任するようであるから、華国鋒はいまやポストとしては毛沢東の地位と周恩来の地位の双方を一挙に手にしたことになる。そして中国では現在、予想通りの雪崩現象が起つて、華国鋒支持の熱狂が渦巻いているようだ。このよきなドラマ

の主人公・華国鋒とは、では一体どんな人物なのであろうか。

年齢、党歴すべて不明

いまや八億の民の領袖に一挙にのしあがつた華国鋒であるが、その経歴にはわからない部分が多い。出生地、生年でさえも諸説があつて定かではない。このよきなナゾを秘めているところが、いかにも華国鋒らしいといへようが、永く彼が工作していた毛沢東の故郷、湖南省湘潭地区では、華国鋒のことを「笑面虎（シアオ・ミエン・フー）」と渾名していたという。「笑面虎」とは、読んで字のごとく「表面はニコニコして心が陰険な人」という意味であり、また「えたいの知れない人物」という含意もある。

なるほど、つい先日、「帝王」の霊前で「悲しみを力にかえ」ることを誓い、「團結するのであつて分裂してはならない」と唱えたはずの人物が、その舌先もかわかぬうちにこのような挙に出たのであるから、「心は虎」でなければならぬであろう。

ところで、周恩来死後の去る二月、華国鋒が國務院総理代行として登場し、去る四月初旬の天安門事件直後、彼が党第一副主席兼國務院総理になつてから、多くの報道は華国鋒が武骨な男でありながら農村出の土のにおいのする、いかにも人民中国のリーダーにふさわしい人物で

あるかのように描きはじめた。今後、このようなイメージづくりがさらにすすめられるであろう。だが、果たして華国鋒はそのように純朴な人物なのであろうか。ここでは、入手して得るかぎりの信頼し得る材料に依拠して、華国鋒の来歴を照射してみよう。

華国鋒の生年については、一九〇九年、一九一〇年、一九一一年、一九二二年、一九一七年など諸説がある。従つて年齢も五十九歳から六十七歳まで幅があつて定かでない。いずれにせよ、六十歳前後とすれば、やはり年齢的には後継リーダーとしてもふさわしいといへよう。出生地についても山西省、江西省、湖南省などの三説があるが、彼は山西説の言葉を話すという一部の報道にもかかわらず、この点も確かではない。なるほど、過般の毛沢東追悼式で弔辞を朗読した際の彼の言葉を聞いてみると、訛りが大変強いが、たとえそれが山西訛りであっても、それだけで山西省出身とはいえず、また外国賓客に山西省出身だと語つたともいわれるが、この点も確定的ではない。内外の専門家筋では、湖南省出身、それも毛沢東の故郷、湖南省湘潭県出身だとの見方がつよい。だとすると、華国鋒は、毛沢東が両親による、強制的な結婚で生活を共にしなかつたとエドガー・スノーに語つた、その最初の妻の親戚だとの噂が中国内部で伝わっているとの有力な情報とも一致するが、この辺

の真偽いかんは中国の政治風土においては、きわめて重要な意味をもつてであろう。

学歴は師範学校出で、一九三七年頃、社会主義青年団員から中国共産党に入党した模様であり、任姓同時に延安根拠地入りを果たして、一説には抗日軍政大学に学んだといふ。いずれにせよ、長征には加わっていないものの、延安には早くから入っていたらしい。一九三九年、楊秀峰（当時、北京大学教授、建国後、最高人民法院院長）に従つて山西省太行山地区へ赴き、抗日遊撃隊の宣伝工作に従事した模様である。

この間、江西省で一時、抗日ゲリラに加つたとの情報もあるが、こうして四〇年代は主に山西省で工作に当たり、山西省諸県（交城県ほか）の党委員会書記を歴任した模様である。一九四九年の中華人民共和国成立後は、党の高級幹部・李雪峰（当時、中共中央中南局組織部長）に従つて党中央直轄の地方ビュローの一つ、党中央中南局（武漢）の組織部および統一戦線工作部の部長となり、一九五二年には湖南省へ移つて省党委員会統一戦線工作部部長となつた。五五年には毛沢東の故郷、湖南省湘潭地区委員書記になつている。

湘潭で毛主席の知遇得る

以来、華国鋒は、一九七一年九月の林



北京の「百万人デモ」で、華主席のプラカードを掲げる群衆（10月25日）

膨事件発生以後、事件の調査工作のために北京へ移るまで、二十年近くの歳月を毛沢東の故郷で過ごすのだが、あの広大な中国社会において、針の一点でしかないような湘潭県で彼が工作してきたことが、今日、大きな意味をもつにいたったのは、いうまでもなく、毛沢東との固有の関係に根ざすのであろうし、また同時

に、その針の一点を一貫して守ってきた人物であればこそ、華国録の今日があるのかもしれない。

彼は農業合作社運動が高まりつつあった五五年十一月、処女論文「農村各階層の動態を十分に研究しよう」を当時の中国共産党の準理論誌『革命』に発表している。だが本誌に訳出した右の論文（別掲）が示すように、華国録の活動はあくまでも党専従者（アパライチキ）としての「農村工作」の分野にあったのであり、彼自身が農民として土にまみれていたのでは決してないのである。しかも、華国録は右の論文の最後を「党の政策を貫徹し実現するためには、まず党内で尖鋭、激烈な思想闘争をくりひろげ、これらの誤った思想を批判し、粛清しなければならぬ」と述べていることに示されるように、きわめて強硬な

党の路線の推進者であった。そして、党委員会書記として党

の組織部や統一戦線工作部を歩んできたということは、彼が一貫して党官僚の地位にあったばかりか、党の特務・公安関係の仕事に従事してきたことを意味するのである。

このことこそ、華国録が昨年一月の第四期全国人民代表大会で公安部長に就任し、今回の「四人組」追放では、中国共産党の特務の重鎮で「毛沢東王朝」の警護を担ってきた人民解放軍八三四一部隊のリーダーであるとともに、要人の警護と監視のための中央警衛処の責任者、汪東興を擁して、一挙に「予防クーデター」を断行した手並みの来歴であったといえよう。

彼は、また、はやくも五五年当時から、劉少奇系列にあった党の湖南省委員会の反対を押し切って毛沢東の旧居を中心とする「毛沢東記念館」「革命事蹟陳列館」の修築にとめたり、毛沢東の出身村である韶山の水利建設工事に尽力したりして毛沢東にむくいたともいわれている。湖南省では副省長もつとめたが、五八年に開始された「大躍進」政策では、当時の湖南省党委員会第一書記でかつての毛沢東の秘書・周小舟が同じく湖南省出身で「大躍進」政策にまっこうから反対した彭德懐・国防部長の側に立って毛沢東に叛いたとき、華国録は断固として毛沢東擁護の先頭に立ったともいわれている。

やがて全中国を揺さぶった文化大革命

では、湖南省出身の劉少奇路線が湖南一帯でも根強いなかで、彼は勇闘、実権派打倒に立ちあがり、張平化・湖南省委第一書記、王延春・同第二書記ら湖南の実権派を追放する先兵となった。六七年夏、華北・中南・華東地区巡視の途中、久々に湖南を訪れた毛沢東には親しく指示を受けている。こうして六七年九月、湖南省革命委員会準備小組副組長となった華国録は、翌六八年四月に全国で最初の省レベルの革命委員会が成立したときにはその第二副主任となり、翌六九年四月の九大大会では「主席団」に選ばれると同時に党中央委員になったのである。七〇年十二月、湖南省党委員会が再建されると、彼は党第一書記兼革命委員会主任に就任して、名実ともに湖南のリーダーになっていたのである。

右を斬り、返す刀で左を

この間、注目すべきことは、やがて極左分子として批判された「徹底造反」の紅衛兵グループ「省無聯」（湖南省会無産階級革命派大連合委員会）から華国録が六八年一月に「地方の走資派」として批判されていることである。そしておそらく華国録は六八年一月二十六日の長沙における「省無聯」打倒の十万人大集會を指導し、極左派鎮圧に重要な役割を演じたであろうが、この経緯は、昨秋の「農業は大衆に学ぶ全国農業会議」で

「右」の鄧小平と「左」の江青が対立したとき、バランスの立場から総括報告をおこないつつも決して左の立場に立たず、今回は「左」の四人組を一挙に切り落としたことも関連するのかもしれない。

こうした経過のち七一年九月の林彪事件に際しては、事件の調査工作に参加するため北京に招かれ、「林彪事件審査

特別委員会」秘書長という重責を担ったのであった。七三年の夏の十全大会ではついに党中央政治局委員となり、昨年一月の全国人民代表大会では國務院副総理兼公安部長に抜擢された。

このような経歴をもつ華国鋒は、汪東興が江青夫人より以前からつねに毛沢東の身辺警護役として「黒子」のように毛沢東に寄りそってきたのと同様、毛王

朝のいわば正系であり、江青らこそ成り上がりの新参者であったのかもしれない。このあたりにこそ、今回のドラマのカギがあるように思われる。だが同時に、周恩来、鄧小平系統の党長老や軍幹部が当面は華国鋒支持に傾いているとしても、やがて「反文化大革命」がすすみ、毛沢東政治のカタをつけるべく非毛沢東化がすすみゆくとき、これらの脱文革の潮流

と華国鋒の過去とのあいだに摩擦が起き、亀裂が生じないという保証はない。今回の華国鋒支持への転換があまりにも急激であるだけに、将来への不安もまた大きいであろう。
遍く人口に膾炙した「放兎死して良狗煮らる」という中国の諺の意味をいまして、そかみしめてゆかねばならないのは、華国鋒その人である。

完全スクープ！本邦初訳「華国鋒」処女論文「全掲載

「農村の各階層動態を十分に研究しよう」

尖鋭な思想闘争を

湘潭地区の一九五三年春季は、七十五の農業生産合作社に重点を置いて試験的にやってみたが、昨冬から今春にかけては四千九百三十三の合作社へと発展し、合作社に加入した農家は農家総数の五・二パーセントに達した。今年の秋のまえにはまた新たに六千四百二の合作社がつくられて、加入農家はすでに十一パーセントに達した。一年来、合作社をつくり合作社を経営するという基本的状況は良好なものであり、そこにあらわれているのは、古くからの合作社は二、三年来すでにきわめて大きな優越性を明白に

示しだしており、多くの合作社がすでに発展して地区全体の農業合作社の旗じるしとなり、手本になっていることである。今年の春まえにつくられた合作社は、一年の努力を経て、早稲と中稲が豊収で、九十パーセント以上の合作社が増産した。整頓活動を経て、個々の合作社以外でも、みな固まってきた。一年来の合作化運動の発展がかなり正常で健全であることの原因は、党中央の正しい方針、政策と省の党委員会の具体的な指導のもとで、一年を通して準備し、一つずつ準備し、一つずつ発展させ、一つずつ固めてゆくという指示を貫徹して実行するとともに、生産をうまくやり、農

村における党の階級政策を貫徹して実行するということのポイントをまず第一にしっかりとつかんだからである。いま、湘潭地区の合作社を、党の階級政策を貫徹して実行するなかでの状況と問題に重点を置いて、以下簡単に述べてみたい。党は過渡期の総路線においてわれわれを教育し、われわれに農村における党の階級路線をまず明確にしたが、われわれが新しい社会主義革命の時期の農村各階層の動態にたいして、調査研究が不足し、階級分析の観点から問題を見ること

がうまくなかったために、貧農および経済的にまだ裕富でない農民の合作化運動における積極性への認識が不足し、体験が浅く、農村の富裕もしくは比較的富裕な農民が合作化への道を歩むうえで、の動揺性についての認識もまた非常に浅く、富裕または比較的富裕な農民を合作社に加入させてこそ合作社の生産をうまくやることができると誤って考えていた。そのため昨冬から今春にかけて合作社をつくらせたときには、多くの地方で富裕中農に加入するよう働きかけることに多くの時間を浪費し、そのため若干の富裕中農を性急かつ不適当に合作社に加入させたが、彼らは加入後、思想問題がきわめて多く、いつも脱退するといって合作社の幹部や社員をおどかしたのである。こうした状況のもとで、多くの合作社

は彼らにたいする思想教育と必要な批判を重視し、反対に経済上の譲歩でもって彼らの気持ちをなだめようとしたが、これこそ不可避的に貧農の利益に損害を与え、合作社の強化にまで影響をおよぼすのである。一年来の合作社の経営経験はわれわれを教育し、われわれは合作社の経営のよしあしや強固であるか否かを体験しはじめ、合作社に参加している人々と共に中心的な人びとは決定的な役割を果たしている。また、貧農や新旧中農のうちの下層中農にしっかりと依拠しなければ、合作社をうまくつくり強化することはできないといえよう。だが、われわれは貧農に依拠することを強調するとき、党内のさまざまな反対思想に遭遇したが、尖锐な思想闘争を経て、党内の思想は一步一步統一に到ることができた。幹部のなかにはどんな誤った思想が存在しているのだろうか？

必ず貧農の指導に従え

ある同志は、中農に依拠しさえすれば合作社の経営はうまくできると考えている。その理由は、中農は生産手段が充足しており、生産経験があり、労働能力があるからだといふのである。貧農は経済

的地位によつて彼らもつとも合作化を必要とするよう決定づけられており、たんに合作社への参加を積極的に希望しているばかりか、同時に合作社の経営にたいしてもつとも積極的で断固としていふことを理解しないのである。湘潭県韶山郷の貧農、陳仁恒は、なぜ合作社への参加が必要かにつれて、「ここ数年の個人経営は、どれだけひどい目に会ったか知らない。一昨年、大通りの附近の三つの田が早ばつで地割れしたとき、私は、道いあがつて灌溉用の機械を借りに行つたが、その途中五、六軒の家を歩くと、ある家では自分で使うからといひ、また別の家では明らかに放置してあるのに貸してくれず、三里の道を走り親戚の家に行ってやつと借りて主軸と本体と部品を三回に分けて背負つて運んだ。そのうえ灌溉用の機械がなければ一滴の水もなくなるところだつたが、親戚が来て返せといふので仕方なくまた数回背負つて返しに行った。自分では牛をもつてないので、いつも他人が使い終えてから借りて私が鋤で耕す手助けをし、いつも人に運れて田植えをした。毛主席がいったことはまちがいない。私は合作化の道を歩むだけだ」と語つた。瀏陽県唐吉郷の貧

農、張良は、個人および他の人と連名で三十二回も申請書を書き合作社へ加入を希望した、と述べている。寧郷県資相郷の貧農、張立権は党支部書記に加入を求めたとき「私の加入は、長いあいだ餓えて食物を求め、長いあいだ日りで雨を求めると同じだ」と語つた。貧農は加入後もまさに合作社をわが家とし、いつも社をうまく経営する方法を考えている。ある者は生活のために社外でアルバイトをし、かせいだ金は、食を切りつめて節約し、さらにいくらかを出して合作社へ投資している。ある者は腹をへらしながらも働きに出る。彼らは合作社で、労苦をいとわず怨み事もいわず、多くの富裕農民がやりたがらないきつい仕事もすぐに行つてやる。

投資する金がないことを心配し、ある者は生活が苦しく目前の生活を解決することに忙しくて公社の活動に参加することが少なく、そのうえ一部の幹部はさらに彼らを差別し攻撃した。そのため、彼らは態度が消極的となるのである。われわれの仕事を深め、貧農が実際の困難を解決することを配慮し、援助し、彼らにたいする育成と教育を強化すれば、彼らは必ず積極的になるであろう。

また一部同志は、貧農に依拠する道理は正しいが、現在貧農は非常に少数であつて、みないささか老弱であり、悪人やごろつきであつたりして依拠する対象にはなり得ないと考えている。実際の情況はどうであろうか？ われわれの調査によれば、長沙県草塘郷の貧農は、なお全村の総戸数の三十四・三パーセントを占めており、湘潭県棋梅郷の貧農は総戸数の二十七パーセントを占めている。これらの人びとは現在なお貧窮であるが、富裕ではない生活をおくつており、その原因は、彼らのある者は財産が乏しく、ある者は借金が多く、毎年の支払い利息が年毎に追いつかないからである。ある者は家族数が多く労働力が少ないかまたはないからであり、ある者は天災や病氣や死亡により経済的に零落したかまたは破産したからであり、ある者は生産が満足にできず、経営もうまくないからである。農村の本当の寡婦や老弱者にいたつては、実際には農村人口のわずか四〜五

に発表された華論文





中共理論誌「学習」

パーセントを占めているにすぎず、悪人やごろつきもごく少数にすぎない。

農村ではやはり貧農はかなりの数を占めており、それらの貧農は少なく、みな老弱でなにもできないとか、悪人やごろつきだとかいう論調は根拠のないものである。新しい中農のうちの下層中農は、土地改革後いくらか上昇したとはいえ、経済的地位はきわめて弱く、彼らは貧農と情況が似ている。旧中農のうちの下層中農は経済的にも裕富でなく、生産と生活においてなお少なからぬ困難がある。そのため彼らは合作化運動にたいしても積極的であり、合作化運動が依拠すべき力である。

新旧中農のうちの上層中農については、彼らは生産手段を多く所有しており、おのずから資本主義化する傾向が強く、かれらは合作社に参加することにたいして消極的であり、反対の気持ちをもっている。湘潭県韶山郷の旧上層中農、鄭春潭は貧農が互助組に加入するのを拒否し、互助組が貧農を加入させようとしたときに、彼は、「組合員に吸収するのに次の五つに該当する者はいらぬ。すなわち、生産のうまくないもの、素性のよくないもの、肥料のないもの、耕牛や

農具のないもの、労働力のないものはいらない」といった。一部の上層中農は強制的に加入させたあと、金があるのに投資しなかった。湘潭県清溪郷の故大海（新しい上層中農）は、彼の家に七百元の預金があったが、何回もの働きかけを経て、しぶしぶ合作社に六円の投資をしただけで、貧農が合作社から金を借りるのを知ると、彼も合作社から四円八十銭を借り、結局彼が実際に投資したのはただの一円二十銭であった。

肥料の投資においてもかくのごとくで、自家肥料は、まず自分の水田や畑へ向け、合作社に出すときは高値を争い、ある者はこのように小さいことにまであれこれいって、「わが家はいいものを食べているから、出す糞も肥料として効用が大きく、他人より値段を高くしてほしい」とさえいった。一部の上層中農は合作社で仕事が忙しいとき働きに出なかつた。長沙県二区の合心村の宝塔合作社では五戸の富裕中農が農繁期に働きに出ず、逆に区に行つて食べてはさわいだ。ある者は、社内では指導権を争つた。長沙県高山郷の壩灣合作社の富裕中農、胡生橋は社の業務管理委員会の指導に従わず、「社内いろいろの事柄は、自分を

通じなくてはやりこなせない」といった。一年来、これらの生々しい事例が幹部を教育し、従つて、合作社をつくり合作社をうまく経営するには必ず貧農と新旧下層中農に依拠しなければならぬといふみんなの認識を一步一歩高めたのである。富裕中農については、比較的自覚した少数の自願の要求が強い者を除いて、現在は無理に彼らをついてきてはならない。古い合作社のなかのすでに加入して現在脱退を望む者については、脱退を許可してよいし、本当に自ら留まることを望む者も、留めてよいが、必ず貧農の指導に従い、集団の利益に従わなければならない。必ずまじめに相互の利益をはかる政策をとりつづけるべきであり、当面は加入を望まないそれらの富裕中農には、しばらくの時間的猶予を与えてよい。

以上、これらの誤つた思想を生む原因は、主にわれわれがまだ土地改革の時期の古い観念に留まつていて、数年来の農村の階級的变化の情況にたいして具体的な分析と理解が不足しているからであり、さらにわれわれの理論水準が低く、階級分析の方法を用いて経済関係から各階級の合作化にたいする態度を分析できないからであり、従つて現象を見るだけで本質を見ぬけぬからである。とくに注意しなければならないのは、若干の区や村の幹部の家庭はもともと富裕中農であるかあるいは土地改革後に上

昇して富裕中農となつたものであつて、社会主義にたいして関心が高くなり、また教育も不足していることである。そのため彼らはいつても知らず知らずのうちに一部の富裕農民の思想や気分を反映しており、貧農の困難を体得できない。

もしも土地改革と同様に田を分配するのだと考えるなら、上昇がないのはまさに怠惰であるからである。そのため貧農にたいして差別的態度をとつたり、一部の生活困難な貧農にたいしていつつ差別したりあてこすつたり、やたらにのしる態度すらもるのであるが、富裕農民にたいしてはむしろ情感が深く、とくにはなほだしい者は、「貧農は社会主義を食いつぶし、中農が社会主義を建設する」とさえいっている。攸県の一人の地区長は貧農をのしつて、「お前たちに依拠したら、社会主義を建設するなどといえないばかりか、この黄土嶺（小さな鎮）さえ建設できない」といった。長沙県召開区郷幹部会るとき、一人の郷長は、「自分は合作社に参加してもいいことではない。もしも自分が党员でなければ、すぐにでも脱退したい」といった。このことは、われわれの一部の農村幹部と党员がすでおのずから資本主義的な傾向への重大な影響を受けていることを説明している。党の政策を貫徹し実現するためには、まず党内で尖鋭、激烈な思想闘争をくりひろげ、これらの誤つた思想を批判し粛清しなければならぬ。

週刊

サンケイ

緊急増刊

11/17¥250

北京クーデター!!

華国鋒と

江青

これからの中国
はこうなる

■ドキュメント

惨殺!?

江青クーデター

■政権争奪の星

人民解放軍の全貌

■特別報告

米ソ謀略戦と中国政変・角間隆

華国鋒主席大研究

不死身の後継者・鄧小平の戦い

本誌独占スクープ・華国鋒「処女」論文

